

# 子どもと教師と協力して



奈良原恵子

静まり返った廊下を通過して、家に帰る前いつものように私は保育室をのぞきに行きました。室の戸をあけたとたんに私はたくさんさんの視線をさっと浴びました。子どもたちの作った動物が私をみたのです。室内中わらのばらまかれたこのジャングルでは異なる感動を身に受けました。こわくないこのユーモラスな動物たちはまるで生きてでもいるかのようなのです。——いきているのかもしれない。子どもたちはこの室から去って家に行ってしまった。しかし子どもたちの魂をこの動物たちにのこして、体だけが帰っていったのです。だから……あの子どもは背よりずっと高いわらわの

麒麟も、背中に毛糸の植えてあるぞうも、わざび楡の顔のライオンも、足に十六本もギッシリくぎのうたれている馬も、ボロ布をつぎ足した長いながいにしき蛇も……すべて子どもの全身で打込んだ魂がのり移っていて今にもノソリノソリと動き出しそうですね。そしてあの喜々とした子たちの声が、動物たちの表情となり、啼き声となって室内にあふれているのです。子どもたちの熱いエネルギーに圧倒されそうでした。そしてこのむんむんした雰囲気を押つぶされながら私は言いしれぬ幸福感と満足感を胸いっぱい感じておりました。それは、子どもたちと本当に協力出来た

という教師ならではの味わえぬ喜びというものなのでしょうか？

× × × ×

「動物園ごっこ」をするという目的を持って子どもたちを連れて寒い二月でしたが上野まで出かけました。帰って「動物園について」の話し合いをしました。話し合いの発展は思いがけぬところに発展しました。

「動物園おもしろかった？」

「ウンウン」「オモシロカッタ」

「ゾウガイタ」「麒麟ガイタ」「ライオンガイタ」

「ライオンネテタヨ」

「タイテイノネテタヨ」

「ツマンナインダヨ」

「どうして？」

「アンナトコニイレラレチャッテサー」

「ジャングルノユメミテタングヨ」

「どんなゆめ？」

「ジャングルニカエッテウントアバレテル

ノ」

「ソウダヨ ジャングルハヒロイシ イット  
パイトモダチガイルモン」

「ソイデ エサダツテウントアルモノ」

「タバタケリヤスグムシヤムシヤタバハラレ  
ルヨ」

「クマモ アツチイッターリコツチイッターリ  
デタガツテタヨ」

「そうね みんなだつたら動物園のライオンと  
ジャングルのライオンと どっちに  
なりたかな？」

「ジャングル!!」机上に上つてまで意志表  
示する子どもたち。

「ボクはドウブツエンガイイヤ。ダツテジ  
ットシテテエサクレルモン。ヨソノドウ  
ブツニイジメラレナクテイイモノ。」こう  
言つたつたひとりの男の子を残して、  
みんなは断然ジャングル党↓

「ウォー ウォー」「ゴォー ゴォー」早  
速子どもたちは動物に早変わり、「動物園に  
は何がいましたか？」などという教師の予  
定した質問を出すひまもなく予期しない話

題が子どもたちから巻き起りました。

動物園の「動物の姿」だけかりて子ども  
たちの夢はあの鉄柵をとび出し広大なジャ  
ングルへと走って行ってしまったのでし  
た。

「動物園ごっこをしましょう」という提案  
は、どこか片隅に追いやられてしまい、私  
も子どものジャングルの夢の中に一しょに  
入って行ってしまいました。そこで大ジャ  
ングル製作の相談がまとまり、早速次の日  
からジャングル作りが始まり保育室は子ど  
もたちの「夢の工場」と化しました。

この子どもたちの意欲と積極性を消失さ  
せないよう私は子どもなりに行きにまかせ  
ました。このような時のいわゆる、「教師の  
協力」は子どもの意欲にとって害になるこ  
とが多いことを過去にさまざま経験して来  
ましたので…… 作った物がどうなるか、  
その後どう遊ばせるか、先の事など考えぬ  
ことにしました。失敗したっていい、こ  
の動物を解放したいという欲望に自分たち

の心をたくして作り上げる柵のない自由  
な動物の国をじつと見つけ歩いて行きまし  
た。ぞくぞく持ち寄られた木の空箱・なわ  
針金・ぼたん・わらなわなどの材料に子ど  
もたちは勇かんにいどんで、おとなたちは  
想像だにしない使用の仕方をして動物たち  
を作っていました。「あああんな所に板  
を打ちつけてしまって」「布などはらねば  
いいのに」と心に思いうっかり口に出そう  
になることもありましたが、それらがおと  
なの思わぬような、独特の表現となって作  
品を生きたものとさせているのです。も  
し教師がヒントを与えてしまったらば、そ  
れは型の上ではよく見えても、生きた動物  
とはならなかつたでしょう。作るのは子ど  
もたちにまかせて、私はただ喜んで作業が  
続けられるような、意欲を湧き起させるよ  
うな、雰囲気を作ることで協力しつづけま  
した。私のした協力——それは、なわを  
ほぐしてたくさんのをらを作りそれを室内  
にばらまくこと、時々ターザンになってあ

の「ア〜ア〜」を発声しながら、動物をみて歩くこと、お辨当をたべるのに、出来かけの動物たちと同じわらの上に坐るのを許したことなどでした。子どもたちにとってはそのだけで十分だったことと思います。子どもの内にひそんでいたエネルギーをこちらで気づき、それを引き出させてあげた喜びをもって力一杯自分の能力を活用させている子どもたちの姿をみておりました。そして私にも新しい自信を子どもたちは与えてくれました。

× × × × ×

ここにいる動物たち、広いジャングルに解放されて生き生きとしている動物たち。子どもと教師の協力がこの動物たちの生きた表情を作り、血をかよわせ命をつくったのだと強く思いました。

もし計画案に忠実に柵に囲われた動物園を作っていたならば、きっとこのように活発な子どもたちの動きは見られなかったでしょう。そしてこの動物たちの表情も……

私はこの経験を通して「子どもへの教師の協力」ということについて更に思いを強くしました。それは子どもの心を知ること。「子どもは希望と夢に生き、そしてたえず自分自身をのりこえて生きつづけていく唯一の存在」ということを理解し、子どもの内部にあるものを自由に発揮出来るようにしむけてあげることだと。そしてわれわれ

おとなもそのような子ども心に勇気づけられて、たえず自分をのり越えていく生き方を子どもから学びとることだと。このような子どもとおとなの協力があつてこそ、子どもは伸びのびと、おとなは若々しくこの世の中を生きて、お互いの幸福をつかむことが出来るのだと思います。

(東京・小川幼稚園)

## Hちゃんの「キテル」



白 井 素 子

四月に入園後十月の中頃まで一言も口をきかなかつたHの口から「キテル」ということばがとび出すまで、六か月ものあいだ同じクラスの子どもたちのたくまない協力を担任教師の私は、実は、子どもにはげまされてこの子の指導をしてきたようにさえ

反省される。主役は子どもたちであり、私は脇役なのだ。それにしても子どもたちの自然にやわらかい心には、ただ、頭が下る思いであり、新米教師の私にとってこのHの指導経験は、またと得がたい大きな勉強であった。「子どもたちは主役、教師の私